王太子殿下の燃ゆる執愛

皐月もも
Momo Satsuki

ノーチェ文庫

登場人物紹介

エルマー

ヴォルフの
もう一人の腹心で
軍の最高指揮官。
ノリの軽い変わり者。

クラウス

ヴォルフの腹心の
文化相大臣。
冷静沈着で、
頼れる部下。

ユッテ

フローラの元生徒の
令嬢。彼女にヴォルフを
とられたと逆恨み
していて……?

ハンナ

ヴォルフの妹。
快活な性格で
親しみやすい王女。

マリー

ヴォルフの次姉。
フローラを可愛がっている。
エルマーとは夫婦。

ソフィー

ヴォルフの長姉。
彼に率直に意見できる
貴重な人物の一人。
クラウスとは夫婦。

ヴォルフ

フラメ王国の第一王子。
フローラに一目惚れし、
彼女を妻にするため囲い込む。
気高く、常に堂々としている。

フローラ

音楽が好きで、ピアノ講師として
生計を立てている。
穏やかで心優しい性格だが、
音楽のことになると
周りが見えなくなることも。

目次

王太子殿下の燃ゆる執愛　7
書き下ろし番外編
熱く刻む独占欲　357

王太子殿下の燃ゆる執愛

豪奢な邸宅の広間は、夜更けだというのに人々の笑い声と音楽に満ちている。

真っ白な壁には炎を象った金色の装飾がなされていた。天井や壁の至る所に宗教画が飾られ、赤い薔薇を挿した花瓶がアクセントを加える。

まばゆい光を放つシャンデリアの下で踊る人々は、一様に派手な衣装を纏い、流れる優雅な音楽に身を委ねていた。

この大きな広間で行われているのは、人々が〝非日常〟を楽しむ仮面舞踏会。誰もが仮面を被り、素性を隠して、時にはスリルをも楽しむ場だ。

多くの者が夜の駆け引きを興がる中、フローラは壁に背を預けて息を潜めていた。彼女にとってもこの空間は非日常だが、それを素直に楽しめるほどの余裕を持ち合わせていなかったのだ。

フローラはここフラメ王国の庶民。国の中でも保守的な田舎の西地区で育ち、音楽学

校を卒業後、城下町でピアノ講師として働いている。

（やっぱり、きちんと断れば良かった……）

フローラはため息をつく。今日のこの時間は、本来ならば貴族の一人娘へのレッスンを終えて、とっくに帰宅しているはずだった。だが、ドレスが気に入らなくて部屋から一歩も出てこない彼女の代わりに、仮面舞踏会に参加することになってしまったのである。

不参加だと、主催者の顔に泥を塗ることになる。そのため、娘に背格好が似ているフローラに白羽の矢が立った。貴族の家の当主に頭を下げられたら断れるはずもなく、彼女は今まで全く縁のなかった仮面舞踏会の会場へとやってきたのだ。

彼女が纏うのは、レースをふんだんに使った、ワインレッドのプリンセスラインのドレス。首元を真っ白なレースで縁取ったスクエアネックで、スカートはドレープでボリュームを出している。胴の辺りにゴールドの刺繍が施され、袖にはフリルが揺れていた。

デコルテを飾るのはダイヤのネックレス。柔らかな茶髪はドレスと同じワインレッドのリボンで纏められ、耳にも、ダイヤのピアスが飾られている。娘は気に入らなかったようだが、誰よりも派手で豪華なドレスだ。

フローラはひっきりなしに男たちから声を掛けられたものの、頑なに首を横に振り続

けた。

仮面舞踏会は、地位にも財産にも恵まれた貴族たちの戯れだ。フローラには敷居が高すぎる。

誰の誘いにも乗らないフローラに声を掛ける者がいなくなり、ようやく壁の花となれたとき、どんなに安堵したことか。

目元を隠す仮面と、相手の名や家柄を聞かないという仮面舞踏会の暗黙のルールに感謝しながら、フローラはそっと目を閉じる。

この会場において、フローラがただ一つ楽しめること……それは、絶えず聴こえてくる、一流の演奏家が奏でるワルツだ。彼女の予想をはるかに超えるメロディの運びは、人々のダンスにスパイスを加え、弦楽器のハーモニーは、軽やかなステップを支える如く重厚に響く。

フローラは、久しぶりに聴く洗練されたオーケストラの生演奏に耳を傾けて、時が過ぎるのをじっと待っていた。

――どれくらいそうしていたのだろう。

今まで全く乱れなかった演奏が僅かに揺れ、フローラは目を開けた。

踊る人々がこそこそと話し始め――特に女性たちのざわめきが大きくなっている。

そのきっかけは、広間に入ってきた一人の男の存在。彼はフリルのついた白いシャツに、シンプルな黒いタキシードを纏っていた。華美な衣装が多いこの会場では、逆にとても目立つ。

目元を煌びやかな仮面で覆っているが、瞳の輝きは隠しきれていない。滲み出る気高いオーラは他の者と一線を画している。髪は燃えるような赤で、体格も良かった。

あの人も、フローラにとっては雲の上の人だろう。

女性たちが男に熱い視線を送るのをぼんやりと見ながら、フローラは早く帰りたいと願った。

しかし、迎えが来るのはまだ先である。仕方なくフローラが視線を床に落とし、再び音楽に耳を傾けるため目を閉じかけたとき――視界に、綺麗に磨かれた革靴のつま先が映った。

「踊らないのか？」

「きゃ――」

思わず小さく叫んでしまったフローラは、パッと顔を上げて声を掛けてきた人物を見た。先ほどの男性が目の前に立ち、こちらを見下ろしている。

男はフローラと目が合うと、目を見開いて黙り込んだ。赤みがかった瞳はしっかりと

彼女を映している。答えを待っているのだろう。
ほんの少し見つめ合って、フローラは震える唇を開いた。急に声を掛けられたせいか、心臓がドキドキと脈打つ。
「い、いえ……あの、ダンスは苦手で……」
「食事は？」
「食欲がなくて……」
再び投げかけられた質問に、フローラは俯いて首を横に振る。会場に用意されていた軽食は、色鮮やかでどれも美味しそうだったけれど、食べる気にはなれなかった。
「飲み物は？」
「……お、お酒は、飲めないんです」
矢継ぎ早に問われ、フローラは困惑しながらもか細い声で答える。
壁際でどんなに小さくなっていても、今の自分のようにやけに着飾った人物がいれば、興味の対象になってしまうのだろう。しかし、きっと他の者と同じで、すぐに反応の薄いフローラに飽きてどこかへ行くに違いない。
そう思っていたのに、彼はフローラの受け答えを聞いて目を細めると、急に彼女の手首を掴んだ。

「行くぞ」
「え、あ、あのっ――」
戸惑うフローラの手を、彼は力強く引いて歩き出す。
会場を出て庭に出ると、彼は歩く速度を緩めた。だが、止まることはなく、花壇で縁取られた道を進む。彼に手を引かれるまま、フローラは何も言えずについていく。
「名前は？」
「え？　あ……ユッテ・アイブリンガーと申します」
歩きながら問われて、つい答えてしまった。
本来なら仮面舞踏会で名を聞いたり、名乗ったりするのはタブーだ。幸いなのは、フローラがきちんと〝名前〟を言えたことだろう。
ユッテ・アイブリンガー――フラメ王国で、一、二を争う名家の一人娘であり、フローラがピアノを教えている生徒の名である。
「仮面だけでなく猫も被るのか？　それとも、俺の興味を引くための演技か？」
「え？」
予想もしていなかった言葉に、フローラはうろたえた。彼は、口を引き結び、彼女を観察するように見据える。

気づかないうちに何か粗相をしたのだろうか。迷わずに名乗ったことがいけなかったのかもしれない。フローラには貴族社会のルールなどわからないし、彼の思惑が全く読めない。

それとも、この男は元々ユッテの知り合いで、いつもと違う態度に疑問を抱いたのだろうか。

いや、そんなはずはない。十八歳のユッテは成人したばかりで、仮面舞踏会も初めて参加する予定だったと聞いている。そもそも男性と知り合う機会などほとんどなかったはずだ。

何にせよ、このままこの男といるのはまずい。

ユッテを名乗ってしまった以上、フローラの行動は今後のユッテの評判に響いてしまう。

「……あの、わ、私……」

フローラは一歩後ずさり、彼に掴まれていた手を引いた。しかし、彼は彼女の手を放さず、じっと探るような視線を注ぐ。

フローラはその視線の強さに身震いした。いけない、と本能的に感じる。彼はフッと息を吐くと「まぁ、いい」と呟き、彼女を自らの方へと引き寄せた。

「きゃ――あ、いやっ」

突然抱き上げられて、フローラは身体を捩って抵抗する。だが、彼はお構いなしに庭の奥へと進んで行く。やがて、小さな広場らしき場所に出ると、そこにあったベンチにフローラを降ろし、彼も隣に座った。

フローラが警戒して離れようとすると、彼がクッと笑いを漏らして口を開く。

「そんなに怯えるな。少し付き合え」

先ほどより幾分か穏やかな声色に、フローラは胸を撫で下ろした。そんな彼女を見て、彼は小さくため息を漏らしたが、何も言わずに黙り込んだ。沈黙が二人を包み込む。

付き合えと言われたものの、一体何を話せばいいのかわからない。この男の興味を引くような話ができるとも思えないし、余計なことまで喋ってしまったら、取り返しがつかなくなる。

結局、ぼんやりと月を見上げることしかできないまま、静かに時が過ぎていった。綺麗な月明かりは、広間のシャンデリアとは違って優しく二人を照らしている。

「綺麗、だな」

ポツリと男が呟く。

「……月の欠片」

「ピアノを弾けるのか？」

男の呟きに促されるように口をついて出たのは、月を見て思い出した曲のタイトルだった。それを聞いただけで、すぐにピアノと結び付けた男に、フローラは驚きつつ慌てて「少し」と付け足す。ユッテはピアノを習ってはいるものの、あまり技量がないのだ。〝月の欠片〟はフラメ王国出身の作曲家が作ったピアノ曲で、美しい高音域の旋律が月の輝きを表現している。曲名はそれなりに有名だが、難易度が高いためか、耳にすることは少ない。

「そうか」

彼は頷きながら、フローラの手を取った。大きな手のひらは簡単に彼女の手を包み込み、彼の高めの体温を伝えてくる。

フローラが手を引こうとした途端、彼は力を込めた。

まるで焦らすように、親指でゆっくりと手の甲を撫でる。彼女が小さく声を上げると、彼は微かに息を呑み、今度は強くフローラの手を引いた。

「や、あ、あのっ！」

指先が彼の口元に導かれる。フローラが驚いて逃げ出そうとするのを察知した彼は、空いている方の手で彼女の腰を抱き寄せる。同時に、フローラは指先に温かな吐息と柔

らかい唇の感触を覚えた。

「――っ」

フローラはギュッと目を瞑り、初めて感じる刺激に身体を震わせた。自由な左手を口に当て、漏れそうになる声を抑える。

指先から手の甲へ、じわりと熱を与えられていく。時折かかる吐息と、湿った唇の感触が、フローラの肌を粟立たせた。

やがて、手首まで丁寧にキスを落としていた男の唇が指先へ戻ってくる。

「ぁ……」

短く切りそろえた爪の先を舌でなぞられ、フローラの喉の奥から小さく声が漏れた。すると、彼は彼女の人差し指の先を口に含み、舌を這わせてくる。

「や、何――あ……」

思わず目を開いたフローラは、自分を真っ直ぐ見つめる熱っぽい目に息を呑んだ。男は視線を逸らさないまま、彼女の手のひらへ唇を移動させ、その中心に、官能的な音を立ててキスをした。

すると、満足したのか、彼はフローラの手を解放する。だが、今度は彼女の身体を引き寄せて仮面に手を伸ばしてきた。フローラは咄嗟に彼の手首を掴む。

「な、何をなさるおつもりですか……？」
「顔を見せろ」
彼の言葉に、駆け引きの色はなかった。
「な、なぜ、ですか？　今日は、仮面舞踏会です。顔を晒しては――」
「お前は本名を名乗った。それに、ここには俺しかいない。隠す必要はないだろう？　今、お前の顔を見ても何も変わらない。俺はお前を気に入った。近い内に城へ招いてやる」
城へ招くという言葉に、フローラは青ざめた。反射的に大きく首を横に振る。
この男は城に住む者――フラメ王国の王族だ。ならば、尚更自分の素顔を晒すわけにはいかない。フローラは、本来ならこの場にはいなかったはずの人間で、ユッテの仮面を被り続けなければならないのだ。
「それでも、今日は――っ」
フローラが身を捩って男から離れようとすると、彼はチッと舌打ちをして、少し乱暴に彼女の顔を自分に向けさせた。
「ん――！」
――熱い。
先ほどまでフローラの手に触れていた唇が、彼女のそれに重なっている。

彼の濡れた舌が唇をなぞり、口内に入り込もうと蠢くのを、フローラは唇を固く引き結んで拒む。同時に、彼の胸を押し返そうと必死に両腕を突っ張る。しかし、彼は彼女の抵抗を簡単に押さえ込み、大きな手でフローラの後頭部を抱えた。
「……っ、はぁっ……ゃ、んん」
息苦しさに唇を開いてしまった隙をついて、彼の熱い舌が入り込んでくる。歯列や上顎をなぞったり、舌を捕らえて吸ったりと、いやらしく彼女を攻め立てた。
くちゅりと音を立てられると、ぞくぞくと震えが背筋を駆け上がる。
「は……ぅん、ン……」
唇の隙間から漏れる声が、自分のものではないような気がした。
フローラを抱きしめる腕の強さとは対照的に、彼の唇やぬるりと口内を這い回る舌の感触は、柔らかくて生々しい。
「ん――っ、ぁっ、んぅ」
自分が自分ではなくなりそうな妖しい空気に耐えられず、フローラは身を捩る。
「もっとだ……声を聞かせろ」
「ゃ……っ、はっ」
腰に添えられていた彼の手がゆるりと背筋を辿り、首筋を撫でる。フローラはビクッ

と身体を震わせた。

「んぁ……や、め……っ」

やめてと言いたいのに、拒む言葉は荒い呼吸と共に彼に呑み込まれてしまう。彼は熱の籠もった息を吐きつつ、フローラの唇を貪っていく。

ちゅく……と水音が激しくなって、口の端から零れ落ちる唾液。どちらのものともわからないそれを、彼の指先が掬い取った。

「……ふ、ン」

大きな手がフローラの頭を支えるように添えられ、親指で耳の縁をなぞられながらキスが続く。壊れ物に触れるみたいな指の動きがじれったい。

離れなくてはいけないのに、彼の体温がどんどん近づいてくる。

「いい表情だ……」

淡い月明かりの下、フローラの反応に満足したのか、彼はそう呟いて笑った。

ようやく唇を解放されて、空気を取り込もうと大きく息を吸う。冷たい夜風が火照った身体に染み込むのが、今までのキスの熱さを知らしめるかのようで恥ずかしい。

「俺の体温が移ったな」

フローラの頬にちゅっ、ちゅっと何度もキスをしつつ、彼は彼女の唇に指を滑らせる。

「このまま、今夜は俺と過ごせ」
「嫌です！　私――ン」
フローラの拒絶が気に入らなかったのか、彼は再び彼女の唇を荒々しく塞いだ。ほんの少し冷めた体温は、またすぐに熱くなる。
「はっ……や……ッ、んぅ」
苦しくて熱くて、情熱的なんて言葉では足りないくらいの熱にどうにかなってしまいそうだ。
「もう、やめ――」
唇が離れる度に訴えるものの、すぐに重なるそれに、フローラは息をすることもままならない。
「んん――ッ」
逃げられない。フローラの思考が彼の熱に溶けていき、抵抗が弱くなる。その隙を逃さず、彼は彼女の目元を覆う仮面に触れ、上へと引いた――
「やっ――」
「ヴォルフ様」
突然響いた凛とした女性の声に、彼の動きが止まった。すかさず、フローラは両手で

顔を覆って立ち上がり、身体を反転させる。
「お前か」
彼が、大きなため息をついて立ち上がる気配がした。
「ヴォルフ様、バルトルト様がお呼びです」
バルトルト様という名前に、フローラの肩が跳ねる。それは、フラメ王国の現国王の名前だ。
「父上には黙っておけと言っただろうが」
「私は何も。バルトルト様の方でお調べになったのではないでしょうか」
彼は女性が喋る度に舌打ちをして、苛立ちを表した。
フローラは震える手で顔を押さえたまま、どうしていいかわからず立ち竦んでいる。
「ユッテ」
それがフローラに対しての呼びかけだということすら、今の彼女には考える余裕がなかった。とにかく、この場を離れなければならない。フローラがユッテでないと知られてはいけない。頭を駆け巡るのは、そんなことばかり。
幸い、彼はもう帰らなければならないようだ。このまま、フローラと彼の縁は燃え尽きる――そう安心していると、彼に急に身体を引き寄せられた。

「覚えておけ。俺は、必ずお前を手に入れる」

フローラを逞しい両腕でふわりと包み込んだ彼は、耳元で囁いてから彼女を解放した。鼓膜を揺らす低い声と「お前を手に入れる」という言葉に、フローラの心がざわめく。

違う。これはユッテに対しての言葉だ。そう思うのに、彼の言葉が頭の中でリフレインする。

二人の足音が遠ざかっていく。やがて気配が消えると、フローラはその場に座り込んで、震える指先で唇をなぞった。

「ヴォルフ、様……」

ヴォルフ・ブレネン――この国に住む誰もが知る、フラメ王国の第一王子。普通なら、フローラのような庶民は、彼に認識すらされないはずだった。

それなのに、ヴォルフはフローラに火をつけていった。不安という名の小さな灯を――

＊　＊　＊

仮面舞踏会の翌日。ヴォルフはある貴族の邸宅を訪れていた。

「ヴォルフ様がいらっしゃるなんて、私、とても嬉しいですわ」

彼は、隣に座り猫撫で声を出しながら腕を絡ませてくるユッテを冷ややかに一瞥し、彼女の手を払い除けた。この手の反応には慣れているものの、不快な気分になることには変わりない。

彼女たちが自分に媚びる理由はただ一つ――ヴォルフがフラメ王国の第一王子、つまり次期国王だからである。皆、王妃の座を手に入れるために猫を被るのだ。

フラメ王国は大陸で二番目に大きく、天候も比較的穏やかで豊かな国。ブレネン家という王室はあるが、国政は議会が中心となって動かしていた。議会には穏健派と強硬派という二大勢力が存在する。

ヴォルフがやって来たのは、その穏健派筆頭であるアイブリンガー家。目的は、昨夜、仮面舞踏会で彼に火をつけた〝ユッテ・アイブリンガー〟を見つけること。

そう、ヴォルフは彼女を気に入ったのだ。

誰よりも着飾っていながら、壁際で息を潜める彼女に興味が湧いて近づいてみた。すると、仮面から覗く色素の薄い茶の瞳に魅入られてしまったのだ。そして、澄んだソプラノの声に、鼓動が高鳴った。

消極的な彼女がもどかしくて、半ば強引に外へ連れ出してキスをした。吐息の合間に

漏れる彼女の声は、ヴォルフを甘美に誘い、彼のなけなしの理性を簡単に燃やしてしまった。

残念ながら、昨夜はヴォルフの不在を嗅ぎ付けた側近イェニーに阻まれたが、ヴォルフは彼女を諦めるつもりはない。

そこで、唯一の手がかりであるアイブリンガー家を訪れたものの……昨夜、ユッテ・アイブリンガーと名乗った女は、このうるさい娘ではない。

「ヴォルフ様、ツレないですわね。今日はお迎えに来てくださったのだと思っていましたのに」

そう言って、ユッテはまたヴォルフの腕に触れ、上目遣いで見つめてきた。

あぁ、やはり彼女の瞳とは違う。ユッテの瞳は、色素は薄めだが、どちらかといえば黒い。指先も、爪が長すぎてピアノを弾けるとは思えない有り様だ。

「迎えに、か。それに間違いはない……が」

ヴォルフが迎えに来たのはユッテであり、ユッテではない。面倒なことになった。

しかし、ユッテが昨夜の身代わりについて話すとも思えない。どうやって彼女に辿り着けば良いのか、少しでも手がかりがないだろうか。

ヴォルフが考え込んでいると、不意に軽く扉を叩く音がした。どうやら、来客を知らせにきたようである。彼は視線を窓の外に向けてすぐ、花に囲まれた道を歩いてくる女に気づいた。

貴族の家を訪れるには少々質素な装いの、小柄な女だ。背丈はユッテと同じくらいで、肩より少し長い茶髪は緩くカールしている。ヴォルフは、すぐに〝彼女〟だと直感した。

ややあってから扉が開き、使用人がユッテに声をかける。

「ユッテ様、ミス・ハルツェンがお見えになりました」

「ヴォルフ様がいらっしゃっているのに、ピアノのレッスンなんかするわけないじゃない！　帰ってもらってちょうだい！」

「ですが、昨日も――」

ユッテのわがままに、使用人は困ったようにオドオドしている。

（ピアノ？　なるほどな）

どうやら、ヴォルフは運に恵まれているらしい。

「もう！　昨日は昨日、今日は今日なのよ！　大体、ピアノなんて――」

「ユッテ」

ヴォルフが声を荒らげるユッテを呼ぶと、彼女はくるりと笑顔で振り返った。

これだけ態度を使い分けることができる娘も、そういないだろう。ヴォルフは内心呆

れながらも、昨夜の女に会うためには仕方がないと、フッと口元を緩めてみせる。
「お前のピアノを聴いていこう」
ユッテの返事は、当然イエスだった。

ユッテのピアノは、聴くに耐えないものだった。ミスタッチが多くて、何の曲を弾いているのかもわからなくなるほどのレベルだ。
ピアノの置かれた部屋には、他にもヴァイオリンやフルート、ハープなどの楽器が綺麗に飾られていた。きっと、本当に飾られているだけなのだろう。
棚には、たくさんの楽譜が並んでいる。特に宗教歌の楽譜が多かった。
だが、それらがヴォルフの気を引いたのはほんの僅(わず)かな時間のみ。彼はユッテのピアノ講師が部屋に入ってきてからずっと、彼女を見つめている。
フローラ・ハルツェン——彼女は震える声でそう名乗った。昨夜と同じ、澄んだソプラノで。
昨夜は仮面で目元が隠れていたが、今はハッキリと見える。大きすぎない目や、スッと鼻が高い顔立ちは、可愛いというよりは綺麗と言われる部類だ。
過度な装飾で昨晩はよくわからなかったが、シンプルな丸襟のワンピースに包まれた

彼女の身体は、女性らしい曲線を描いている。
ユッテの指遣いを直したり、楽譜に注意事項を書き込んだりする度に揺れる茶髪はとても柔らかそうで、触れたいという欲求が湧き上がった。
観察されているのがわかっているのか、それともヴォルフがこの国の王子だからなのか……フローラは彼の視線に怯(おび)えているようだ。
ヴォルフは思わず笑みを浮かべ、ソファから立ち上がった。
「ユッテ、月の欠片(かけら)を弾いてみろ」
彼がグランドピアノの屋根に軽く手を添えて言うと、ユッテは一瞬眉を顰(ひそ)め、フローラは肩をピクリと揺らした。これほどわかりやすい反応をしながら、この二人はまだヴォルフを謀(はか)るつもりなのだろうか。
「私、ピアノは始めたばかりですから……ねぇ、先生？」
「え、えぇ……ユッテ様には少し難しい曲ですね」
フローラはヴォルフから距離を取るかのように、震える足を引いた。
「でも、ヴォルフ様のお好きな曲でしたら、私、頑張って練習いたしますわ。先生、次のレッスン曲は月の欠片にしてちょうだい」
どちらが先生なのかわからない口調でユッテが言い、フローラが「はい」と返事をする。

「いや、今聴きたい。〝先生〟は弾けるんだろ？」
「い、いえ……あの、私はこれから、すぐに次のレッスンがありますので……」
ヴォルフが逃げ道を塞ごうと畳み掛けると、フローラは慌てて窓際へ駆けて、荷物を手に取った。
「今日はここまでにしましょう。次はいつもの時間に参ります」
そう早口で言って、フローラは扉へ向かおうとする。ヴォルフは彼女の細い腕を掴んで止めた。
「そのレッスン、俺がキャンセルさせる」
「な、何を――そんなことはできません」
フローラは目を見開いて首を横に振る。だが、ヴォルフはそれに構わず、側近のイェニーを呼び出すため、人差し指に炎を灯す。
この世界には、数多くの魔法が存在する。彼が今使用している、特定の人物と炎を介して会話ができる魔法は、ヴォルフたち上流階級の人間にとって基本だ。これはお互いの気――精神力のようなもの――を認識して繋がることができる。
「城下町のピアノ講師、フローラ・ハルツェンの今日のレッスンがすべてキャンセルになるよう、根回しをしろ」

『は……？』
炎がパチッと弾けて、イェニーの呆けた声が聞こえた。
「いいな。城へは夕方の会議までに戻る」
ヴォルフはイェニーの返事を聞かずに炎を吹き消す。そしてユッテに向き直り、口を開いた。
「悪いが、俺は昨夜の〝ユッテ〟を迎えに来た。こんなに簡単に見つかるとは思わなかったが」
「おっしゃっている意味がわかりませんわ。ユッテは私です」
ユッテは淀みない口調で言いつつも、フローラを睨みつけている。
「昨夜、俺が気に入った女は、間違いなくこのフローラ・ハルツェンだ」
ヴォルフが言い切ると、ユッテは嫌な顔をしながら反論してきた。
「一体、何を根拠にそんなことをおっしゃるのです？」
「演技をさせるなら、役者を雇うべきだったな。仮面を被るからと適当に衣装を着せたのだろうが、俺の目は誤魔化せない」
――この心臓も。
フローラの姿を見たときからずっと、ヴォルフの胸は〝彼女〟だと訴えるように高鳴っ

ている。

「これ以上茶番を続けると言うのなら、こちらもそれなりの対応をさせてもらう。俺は穏健派に媚を売るつもりはない」

ユッテの父親ヨーゼフを中心とする穏健派は、フラメ王国の国教であるシュトルツ教に信仰が深く、教会との結びつきが強い保守的な派閥だ。彼らはフラメ王国民特有の炎属性に誇りを持ち、それを与えてくれた神と、守ってきた先祖に敬意を示している。

一方、強硬派は誇り高きフラメ王国民の中でも特にプライドの高い人間の集まりだ。主にフラメ王国の軍部の者が属し、武力派とも呼ばれる。軍部は陸軍と海軍に分かれていて、この二つも対立している。

両派とも、王家との繋がりを持った方が政治的に有利になれると考えていた。そのため、若い娘のいる家は競って、娘をヴォルフの婚約者候補に推している。議会で揉めることは日常茶飯事だ。

ヴォルフは、その中から妃を選ぶつもりは毛頭なかった。彼自身も、王家も、どちらの勢力にも属さない方針なのだ。

「フン。ユッテはこれ以上策がないようだが、お前は？」

唇を噛み締めて黙り込んだユッテを一瞥し、ヴォルフはフローラに問いかける。彼女

はビクッと顔を上げた。

彼女は色素の薄い瞳を潤ませ、昨夜ヴォルフを焦がした柔らかな唇を震わせている。

「私、仮面舞踏会なんて出ていません……」

「ほう？　俺は〝昨夜〟とは言ったが、仮面舞踏会とは言っていない。よくわかったな？」

ヴォルフはフローラの顎に手をかけ、親指で赤く色づいた唇をなぞった。自分の失言に気づいたらしいフローラが息を呑む。

「それに、この手の感触を覚えている」

そう呟いたヴォルフは、もう片方の手でフローラの小さな手を掴み、口元へ近づけた。唇が触れると彼女は思いきり手を引こうとしたが、昨夜と同じく、彼の大きな手はフローラのそれを握ったまま放さない。

「お、お戯れはおやめくださいっ」

「それは俺の台詞だ。いい加減にしろ。仮面舞踏会に来たのはお前だろう、フローラ」

フローラは、必死にもがきながら首を横に振った。

「違います！」

ヴォルフはため息をついてフローラの手を放す。直後、彼女が一歩後ろへ下がって彼と距離を取る。

「お前はさっき『次はいつもの時間に来る』と言った。つまり、今日のこの時間がいつもとは違うということだろ？」

畳み掛けると、フローラの視線が微かに泳ぐ。ヴォルフはその動きを見逃さなかった。

「いつもの時間は夕方か夜か？　使用人の様子からして、昨日はレッスンをしなかったようだな。レッスンに来たところで、ユッテの身代わりを頼まれでもしたんだろう」

ヴォルフはユッテを振り返り、続ける。

「ヨーゼフの企みか、お前の企みか、どちらでもいいが……良かったな？　お前たちの望み通り、俺は〝ユッテ〟を見初めた」

そんな皮肉を口にして、ヴォルフはフローラに視線を戻す。彼女は真っ青な顔をして震えていた。一国の王子に見初められてこんな顔をする女を、彼は初めて知った。

「フローラ」

「――っ」

今にも泣きそうなフローラは、ビクッと視線を上げる。

「俺は言ったはずだ。必ずお前を手に入れる、と」

「ご、ご冗談を――」

フローラは震えながら部屋の扉まで後退し、ヴォルフにくるりと背を向けた。膝丈のスカートがふわりと翻る。

「城に招いてやると言ったことも忘れるな」

ヴォルフはフローラを追わず、その背中に声を掛けるにとどめた。彼女は振り返ることなく走っていく。クリーム色のスカートがなびくのを眺め、彼はフッと笑った。

「ユッテ。お前のピアノのレッスンは今日で終わりだ。続けたければ他の講師を探せ。俺は帰る」

それだけ言い残し、ヴォルフはアイブリンガー邸を後にした。

＊　＊　＊

アイブリンガー邸から逃げるように出ていった翌朝。一睡もできないまま夜を明かしたフローラは、自室のベッドでのろのろと身体を起こした。

背後から聞こえた、威厳を含んだバリトンの声が、まだ耳に残っている。

――城に招いてやると言ったことも忘れるな。

そんなことはありえない。フローラはただのピアノ講師だ。自分自身に一晩中そう言い聞かせながらも、怖くて仕方がなかった。……ヴォルフなら、何でも可能にしてしま

う気がしたから。

すべてが強引で、それでも人を従わせる強いものを持った、炎に似た人。第一王子であるヴォルフは、このフラメ王国初代国王の直系だ。

昨日、彼に鋭い目つきで観察され、首筋がチリチリとしたのを、今でもハッキリと思い出せる。

一体、何がどうなって、自分のようなピアノしかとりえのない娘が、一国の王子に迫られることになってしまったのだろう。

フローラはベッドを降りてコップに水を注ぎ、喉を潤した。シンクにコップを置くと、ため息が漏れる。

仮面舞踏会に行くことになったのは、本当に予想外だった。

ユッテのレッスンは、週に一度決まった日に行っている。教会での演奏がきっかけで、彼女の父ヨーゼフから直々に頼まれたのだ。

フラメ王国指折りの名家のお嬢様にレッスンなんて、正直に言って畏れ多かった。しかし、両親へ仕送りをしているフローラにとって、収入が増えることは単純に喜ばしい。

両親はまだ現役で音楽学校の講師をしている。特別貧しい家庭ではないが、今まで彼らには苦労をかけてきた。

フローラを育ててくれたことや、音楽学校に通わせてくれたこと、無事に卒業させてくれたこと……これらは両親の力があったからこそだ。

お金だけが方法ではないのは重々承知だが、仕送りはフローラにとって、一つのけじめのようなものだった。

何より、自分は大丈夫、一人でも生きていけるのだ、と伝えたい気持ちもあってのことだ。

結局ヨーゼフの申し出を受けたフローラだったが、彼女の憂いは少し違った形で当たることとなる。ユッテはどんなに贔屓目に見ても、〝わがまま〟な娘だった。

練習曲をほとんど完成させないまま、「飽きた」という理由で新しい曲を弾きたがる。ピアノを弾くために爪を短く整えることを嫌がるし、指遣いや演奏の注意をすれば、あからさまに不機嫌になる。レッスンをしていても、全く教えている実感がない。

二日前の仮面舞踏会の日に至っては、アイブリンガー邸を訪れたフローラの前に姿を見せすらしなかった。夜に催される仮面舞踏会のために新調したドレスが気に入らなくて、部屋に閉じこもってしまったのだ。

当然、レッスンはキャンセルになるはずだった。ところが、ヨーゼフはフローラに娘の代わりに仮面舞踏会へ出席することを頼んできたのだ。そして、フローラはヴォルフ

と出会った。

（どうしたら……）

フローラは今朝のレッスンへ向かう準備をしながら、寝不足でぼんやりする頭を回転させる。顔を洗ってみたが、ちっともスッキリした気分になれない。

ヴォルフはなぜかフローラを気に入って、城に招いてやるとまで言った。彼の言動には、全く迷いなど感じられなかった。きっと、いずれ実行するだろう。

フローラは嘆息してレッスン用の鞄を手に取る。今朝の生徒のための楽譜を入れようとしたとき、鞄の中に封筒が入れっぱなしだったことに気づいた。

その中身は、昨日アイブリンガー家の執事から受け取ったレッスン代だ。仮面舞踏会の日の、キャンセルしたはずのレッスンの分と、昨日の振り替えレッスンの分――ヴォルフとの出会いと再会をもたらした、二日間の対価。

（家に送らなきゃ）

とにかく、実家への仕送りは今回も済ませられる。フローラは気を取り直し、鞄から封筒を取り出してベッド横の小さな机の引き出しに入れた。

鞄を玄関先に置き、朝食の準備をするため簡易キッチンへ向かおうとしたとき、軽くドアベルが鳴る。朝早くの客人――それだけで、フローラの鼓動が痛いほど激しくなった。

「は、い？」

「……朝早くから申し訳ございません。こちらはフローラ・ハルツェン様のお宅でよろしいですか？」

玄関に近づき震える声で答えると、ややもしてから、聞き覚えがある少し低めの女性の声が響いた。

「フラメ王国第一王子の側近を務めております、イェニー・ルセックと申します」

「――！」

そう、仮面舞踏会のときヴォルフを呼んだ声だ。

フローラは思わず後ずさった。すぐに声が響いてくる。

「フローラ様にフラメ城へお越し願いたく、お迎えに上がりました」

フローラは震える指先を隠すように拳を握り、両手をギュッと胸に押し付けた。

「フローラ様？」

イェニーは、先ほどから答えないフローラを訝しげに呼んでいる。フローラはゴクリと唾を呑み、息を吸い込んだ。

「私……今日はレッスンがありますので」

フローラが少し厳しい声を出すと、イェニーは黙り込んでから、申し訳なさそうに続

けた。

「あの、レッスンについてなのですが、すべてキャンセルにさせていただきました」

「なっ⁉」

キャンセル――それは、フローラの収入がなくなるということだ。いくら王子とて、一国民の生活を脅かす真似が許されるはずがない。

「そんなの横暴です！」

フローラは早朝だということも忘れて叫んでしまい、ハッとして口を噤んだ。

「申し訳ございません、ですが――お待ち――でも、そ――」

不意に、イェニーの声が途絶える。フローラに話し掛けているのではなく、誰か他の者と話している様子だが、声が小さくて聞き取れない。

先ほど大声を出したせいで、近所の人が出てきたのだろうか。

このアパートメントは、部屋は狭いけれど、城下町の物件とは思えないほど安い。管理人も人が良く、市場も近くて助かっている。他の住民とトラブルになって追い出されては困るのだ。

フローラは慌てて鍵を開けて、ドアを開いた。

「ちょっ、ヴォルフ様、また勝手に――！」

「あのっ、ごめんなさい。大声を出したのは――っ」

イェニーの焦ったような声と、フローラの謝罪の言葉が同時に途切れる。ボッという音の直後、玄関前に大きな炎が上がった。

その炎の中から姿を現したのは、ヴォルフだ。

彼が使用したのは、炎に身を包み瞬間移動する高度な移動魔法。普通は、あらかじめ魔法をかけた特定のポイントのみにしか移動できない。使いこなせるのは特別な訓練を受けた者だけであり、今回のように何もない場所へと移動できる者は、その中でも少数だ。

ヴォルフは不機嫌そうにイェニーを見た後、フローラを見た。フローラは咄嗟にドアを閉めようとしたが、逞しい腕が伸びてきてグイッと力強く引き寄せられる。彼女の身体はすっぽりと彼の腕の中に収まった。

「イェニー、後はわかっているな？」

低い声がフローラの頭上から聞こえる。ヴォルフの声にあわせて、厚く逞しい胸板から微かに振動が伝わってきた。

「はい。ですが、フローラ様の許可をいただいておりません」

「許可は俺が出す。フローラは城へ連れて行く。すべて伝えてあるんだろ？」

「途中でヴォルフ様がいらっしゃったため、まだレッスンの件しか申し上げておりま

せん」

フローラが離れようともがいても、ヴォルフはびくともせずにイェニーと会話を続ける。

フローラは腕を突っ張って彼を見上げた。

「あのっ！　は、放して……くださ、い……」

最初こそ勢いよく言葉が出たものの、見下ろす赤色の目の鋭さに、尻すぼみになってしまう。

「きょ、今日の、レッスンはまだ間に合うと思いますから……もう、キャンセルはしないでください。わ、私にも、生活があります」

フローラはヴォルフの真っ直ぐな視線を避けるため、イェニーの方へ顔を向けた。

だが、大きな手がフローラの頬に添えられて、彼の方を向かされる。

「全然伝わっていないぞ、イェニー」

ヴォルフはフローラをじっと見つめたまま、イェニーに呆れたような声を掛けた。

「ですから……それは、私が説得する前に、ヴォルフ様がこちらへ来られたからなのですが？」

「お前がもたもたしているからだ。――フローラ」

苛立った声で言ってから、ヴォルフはフローラの頬に添えた親指をツッと滑らせる。

正統な炎の血を受け継ぐ彼の炎の力が強いからか、触れられると、身体の中が沸き立つような感覚が生まれる。また、彼の強い視線の前では、すべてを見透かされている気分になるのだ。

怖い――これが、フローラの正直な感想だった。ヴォルフの大きな体躯や鋭い目つきもそうだけれど、彼女は自分自身の変化を怖がっている。あの仮面舞踏会の夜、彼の唇で灯された火が、いまだに内側で燻っていた。

「お、お引き取りください。私、お城へはっ……行きません」

「行かないと困るのはお前だ」

ヴォルフはフローラの髪を梳くように指を滑らせて一房耳にかけ、彼女の耳の縁をゆっくりとなぞる。

「フローラ様、申し訳ございません。レッスンをすべてキャンセルさせていただいたというのは、その……貴女は昨夜、アレンス音楽教室を退職したことになっております」

「え……」

心底申し訳なさそうな声色で紡がれたイェニーの言葉に、フローラは固まった。アレンス音楽教室は、フローラが城下町に移住してからずっと世話になっている勤め先だ。

雇い主のアレンスはとても温和な老人で、年を取ってたくさんの生徒を教えることが大変だからと、フローラを雇ってくれた恩人だった。

彼女の戸惑う様子を見て、イェニーが言葉を続ける。

「ミスター・アレンスには、きちんと許可をいただきました。今日、私がお迎えに上がったのは、貴女を宮廷ピアニストとしてフラメ城へとお招きするためです」

呆然としたままのフローラを眺めて、ヴォルフも口を開いた。

「この部屋も引き払う。というより、もう出て行くと管理人には伝えてある。そうだな、イェニー？」

「はい」

「なっ――！」

本人の意向を無視して勝手に仕事を辞めさせたあげく、部屋も引き払うなんて。いくら王族とはいえ、こんな勝手なことが許されていいのだろうか。

怒るべき場面なのだが、困惑が大きくて声にならない。

これからどうすればいいのか、フローラは必死に考える。今からでも、退職は自分の意思ではないとアレンスに話さなくてはならない。また、管理人にも事情を説明して、引き続きこの部屋に住まわせてもらえるように――

「宮廷ピアニストの職を断れば、お前の信用はガタ落ちだ」

だが、ヴォルフは先回りして追い討ちをかけ始めた。

「アレンスは熱心なシュトルツ教の崇拝者だな。お前を宮廷ピアニストとしてフラメ城へ迎えたいと言ったら、それは喜んでいた。娘同然に思っていたお前が、そのような名誉を受けて嬉しいと」

シュトルツ教は、フラメ王国で最も信者の多い宗教だ。フラメ王国民として炎の血を受け継ぐことを誇りとし、それを継承していく大切さを説く教えは、フラメ国民の矜持の礎とも言える。

信心深いアレンスはシュトルツ教会に頻繁に通っており、フローラはその縁で、教会で演奏をさせてもらっていたのだ。

「第一王子である俺、つまり王家直々の申し出を断るということが、アレンスにとってどういう意味か、わかるだろ？」

炎属性に誇りを持つシュトルツ教は、自分たちの先祖、そしてこの国の炎の血を守ってきた王家を崇拝している。

彼らの申し出を断るなど、アレンスが許すはずがない。つまり、フローラがここでアレンスのもとへ戻ったとしても、復職できる可能性は低い。

フローラはギュッと唇を噛んだ。それを咎めるように、ヴォルフは彼女の耳を弄んでいた指先をスルリと唇へ滑らせる。

「それに、このアパートメントは人気の好物件だ。お前が出て行くと伝えた時点で、もう次の入居者も決まっている」

ゆっくりと焦らすみたいに唇をなぞられて、フローラの身体が震えた。離れたいのに、体格差と力の差をどうすることもできず、逃げられない。

「言っただろう。お前を城に招く、と」

確かにヴォルフはそう言った。けれど、こんな強引な手段を取られるなんて……

もはや何も言えなくなるフローラに、イェニーがおずおずと声をかけた。

「フローラ様。すべての手続きを行った私が申し上げるのもおかしい話ですが、今、貴女には城に上がられる以外の方法はございません」

本当に、こんなおかしいことは今までの人生で初めてだ。突然すぎて、どう対処したらいいのかわからない。

「宮廷ピアニストは長い間不在でして、貴女のことをお話ししたら、国王様も演奏を聴いてみたいとおっしゃいました。ですから、一度城できちんとお話をして、それでも納得していただけなかった場合には、私が責任を持って貴女の新しい職と住居を手配いたします」

新しい職と住居というところで、ヴォルフの腕に力が籠もった。彼はどうしてもフローラを城へ引き入れるつもりらしい。

フローラも、職がないと困る。短い間を食い繋ぐくらいの貯えはあるが、住む場所をすぐには準備できないのだ。新しく住居を探すにせよ、あまり高い家賃は払えない。かと言って、安いだけの変な物件には住みたくなかった。

「来るな？」

フローラの頭の中を読んだかのように、ヴォルフが聞く。

フローラは、彼の指先の熱を感じながら小さく頷いた。どちらにしろ、頷かざるを得ない状況だ。

ヴォルフは満足そうに口角を上げる。イェニーがホッと息を吐いたのが聞こえた。

フローラを更にきつく抱きしめたヴォルフが呪文を呟く。すると、フローラは浮遊感と共に熱に包まれた――

＊　＊　＊

突然、ヴォルフに移動魔法で城に連れてこられてから数時間後。
フローラは、客室の鏡台の前に座って鏡面を見つめた。そこには、煌びやかに変わってしまった自分の姿が映っている。
彼女が着ているドレスは、白い生地に赤い糸で花柄が刺繍された、長い丈のシンプルなベアトップ。ハイウエストの切り替え部分は、赤いリボンがアクセントになって可愛らしい。
髪もすっきりと纏められ、メイクはナチュラル。キラキラと光るピアスとネックレスまでつけていて、まるで御伽噺のお姫様のようだ。
「さぁ、フローラ様。謁見の間へご案内いたします」
フローラの支度を整えてくれた侍女の一人が、白のハイヒールを床に置き恭しく礼をする。フローラは慌てて自分も頭を下げ、靴に足を入れると導かれるまま部屋を出た。
城の天井は、空を見上げているのではないかと思うほど高い。そこに見える天井画は、神が炎の力を人間に授ける様子が描かれたもので、炎が燃える様をモチーフにした彫刻

で囲まれている。
広いエントランスの先には、赤い絨毯が敷かれた廊下がずっと続いている。
先ほど、ヴォルフの移動魔法の炎に包まれて降り立ったのは、このエントランスだった。左右に分かれた廊下を、客室とは反対側へ進む。
奥にある重々しい扉の前に立つと足が震えた。今から国王に会うのだ。
国王には、ヴォルフから約束を取り付けてあるらしい。
やがて扉が開き、フローラは恐る恐る足を踏み出した。謁見の間には、すでにヴォルフが立っている。彼はフローラの方を向いて、鋭い眼差しで彼女を射抜く。その迫力に、思わず肩が跳ねたフローラは足を止めた。
すると、奥から気遣うような声をかけられる。
「フローラ、だったな？　そんなに硬くならなくてよろしい。さぁ、こちらへ」
「は、はい……」
ヴォルフの立つ位置よりも数段高い場所に置かれた玉座に、フラメ国王バルトルトが座っている。彼の隣に座る女性は、王妃のレーネだろう。彼女は優雅に微笑み、フローラを見つめている。
温かな二人の表情にホッと息を吐いて、フローラは歩を進めた。

ヴォルフより数歩離れた場所で足を止めると、彼はキュッと眉根を寄せてフローラの腕を掴み、自分の隣に立たせた。

「ヴォルフ、そんな乱暴にしないでちょうだい。女性の扱いがなっていないわ。フローラはピアノを弾くのでしょう？　手を痛めでもしたらどうするの」

レーネの厳しい指摘に、ヴォルフは舌打ちをして手を放した。解放されたフローラは、改めて彼と距離を取る。

それを見たバルトルトがクッと笑ったところ、ヴォルフの眉間の皺が深くなった。フローラは俯いて冷や汗をかく。

「フローラ」

「は、い」

バルトルトの呼びかけに顔を上げると、にっこりと笑った彼はパチンと指を鳴らした。すると、部屋の横の壁が開き、大きなグランドピアノが運び込まれてくる。

「一曲、弾いてみてくれないか」

ピアノがセットされ、バルトルトが言う。

宮廷ピアニストとして雇うというのは本当らしい。正確には、雇うかどうかをフローラの演奏で決めるのだろうけれど。

「曲は何でも構わない。得意な曲でも、一番好きな曲でも」

「はい……」

ピアノが出てきたことで少し落ち着きを取り戻したフローラは、頷いてピアノの椅子に座った。

そっと鍵盤に手を置けば、乱れていた鼓動が、テンポを取り始めるように規則正しくなっていく。

フローラは大きく息を吸い込んで、力強く鍵盤を弾いた。

選曲は迷わなかった。炎の血を祝福するピアノ曲――長年続く王家の中で、唯一作曲家として活動したミュラー・ブレネンの〝炎の栄光〟。

城のエントランスを見た瞬間、フローラの頭の中に、この曲のメロディが流れたのだ。誇り高き炎属性の、荒々しくも力強い調べ。時折まじる不協和音すらも計算され尽くした、洗練された曲である。渦巻く炎を表現した主題の展開は大胆で、しかし、統一性を失うことなく、聴く者の心を最後まで捕らえて放さない。

フローラは演奏しながら、ミュラーと同じ気持ちで弾いているような感覚に酔いしれる。熱く巡る、音楽への情熱――

最後の一音の響きが途切れ、それが空気に溶け込んでからも、しばらく静寂が続いた。

やがて、その場にいた皆の口からため息が漏れ、少し遅れて拍手が響く。
「素晴らしいわね。フローラ、ぜひ貴女をこの城のピアニストとして迎えたいわ」
「あぁ。フローラ、宮廷ピアニストのオファー、受けてくれるね？」
レーネとバルトルトは手を叩き、とても嬉しそうに笑っている。フローラは、自分の演奏が気に入ってもらえたことに喜びを覚えた。ピアニストとして、聴く人の笑顔は更なる原動力になる。
だが、田舎から出てきた小娘よりも経験が豊富で、もっと華麗なパフォーマンスができる演奏者はたくさんいるはずだ。フローラには荷が重い。
「あの、そのことについては――」
フローラが辞退するよりも早く、ヴォルフが口を挟む。
「もうすべての手配は済んでいる。父上、フローラには二階の特別室を使わせます。よろしいですね？」
フローラには特別室がどんなものなのかはわからないが、とにかくその名の通り、自分にはもったいない部屋なのだという予想はついた。第一、フローラはまだ宮廷ピアニストを引き受けるとは言っていない。
「待っ――」

「それから」
フローラが慌てて立ち上がりヴォルフを止めようとすると、彼はそれを遮って彼女の肩を引き寄せた。
「俺は、フローラ・ハルツェンを婚約者にすると決めました」
言いたいことを言い終えたヴォルフは、またフローラの手を引いて、謁見の間の出口へ歩き始めた。
よろけたフローラは、おたおたとヴォルフを追いかける。自分の話を聞いてくれない王子に何と声を掛けたらいいのか、どう説得したら聞き入れてもらえるのか、全くわからない。
それに、いくらピアノの腕を認めてくれたからといって、庶民の娘を婚約者にするなど、国王も王妃も許すはずがないではないか。
そう考えたフローラは、一生懸命足を動かしながらレーネとバルトルトの方を振り返った。ヴォルフの両親である国王と王妃ならば、彼を説得できるだろう。
「ヴォルフ、待ちなさい」
嘆息してヴォルフを呼び止めたバルトルトに、フローラはホッと胸を撫で下ろした。
ヴォルフは足を止め、気だるそうに両親の方へ向き直る。

立ち読みサンプルはここまで

「私はまだ、フローラが宮廷ピアニストとしてこの城に残ってくれるかどうかの返事も聞いていない」

しかし、ヴォルフは父の言葉を気にした様子もなく口を開く。

「フローラの勤め先には退職の話を通してある。アパートメントも引き払った。城に残らざるを得ない。イェニーがすぐに荷物を持ってくる」

先ほどまで、ヴォルフは国王に丁寧な言葉遣いをしていたが、今は完全にカジュアルな話し方だ。フローラは王族のしきたりなど知らないものの、もう少し態度を改めたほうがいいのではないかと感じてしまう。

「お前はまたイェニーを困らせたな。しかも、フローラの職を勝手に奪ったなど……」

バルトルトは首を横に振って目頭を押さえる。レーネは「まったく」と嘆くように言い、フローラへ視線を向けた。

「ごめんなさい、フローラ。けれど、貴女の演奏をとても気に入ったの」

王妃に謝罪され、更に宮廷ピアニストの職を引き受けて欲しいと言われ、フローラは言葉に詰まる。

宮廷ピアニストという職は、非常に名誉なことだ。それは理解しているし、ここまで

自分を気に入ってくれているらしい国王と王妃の申し出を断り続けるなんて、フローラにはできない。

「わかりました……ですが――」

「これで問題ないだろ」

もう何度目だろう。フローラの言葉を最後まで聞かないまま、ヴォルフは彼女の手を引く。

「ヴォルフ！　婚約の件も、フローラの返事を――」

「わかっている！」

「全然わかっていないわよ」

ヴォルフが再びフローラの手を取って歩き出すのと同時に、謁見の間の扉が開く。

入ってきたのは、三人の女性だ。先頭を歩く女性は、ヴォルフの前で立ち止まり、人差し指で彼の胸を突いた。

「女性の扱いがなっていないわね？　ヴォルフ」

厳しい声色で言い、その女性はフローラの手を掴んでいるヴォルフの手に視線を落とした。すると、彼は大きくため息をついて手を放す。

「まったく……ごめんなさいね。フローラ」